

# 容貌の印象形成に及ぼす過般化の影響 — 顔だちマップの理論的基盤に関する実験的検討 —

Effect of overgeneralization on evaluation of facial impressions  
-An experimental approach to the theoretical background of the Facial Features Map-

阿部恒之<sup>1)</sup>、大川恵<sup>2)</sup>、高野ルリ子<sup>3)</sup>

Tsuneyuki ABE<sup>1)</sup>, Megumi OHKAWA<sup>2)</sup>, Ruriko TAKANO<sup>3)</sup>

E-mail : abe1t@sal.tohoku.ac.jp

## 和文要旨

顔だちマップは意図したイメージを得るためのメーキャップ支援ツールである。顔の類似性判断の多次元尺度構成法の結果から導き出された2次元（フォルム軸・バランス軸）の形態座標からなり、フォルム軸は顔の輪郭や目・眉・鼻・口などの要素が直線的か曲線的か、バランス軸は顔の長さや要素の配置が大人的か子供のかを示す。さらに、この座標で区切られた4象限は4つの基本的な印象（キュート・フレッシュ・クール・やさしい）、いわば人格印象と対応している。本研究では顔だちマップの心理学課題のうち、1) 顔の形態と印象の関連性を前提とする顔だちマップ構造の頑健性 2) 形態と印象の関連性の理論的背景 に注目した。

12枚の女性顔写真を刺激として、40人の女子大学生がその形態印象・人格印象・感情評価を評定した。各刺激を形態印象で構成した座標と人格印象で構成した座標それぞれに布置した後、顔だちマップと方向を合わせて重ねたところ、ほとんどの刺激の位置は近似していた。感情評価については因子分析を行い、親近性と成熟性の2つの因子が抽出された。これらの因子得点と、形態印象・人格印象から新たに得られた顔だちマップ座標の関連性を検討したところ、親近性がフォルム軸と、成熟性がバランス軸と有意な相関を示した。

独立評定から得られた形態印象と人格印象の近似した布置は、顔だちマップの形態-印象構造の頑健性を支持する。親近性・成熟性の顔だちマップ座標との非対称な相関は、形態と印象の関連性が親近性と成熟性の過般化に基づく可能性を示唆する。この結果は顔識別や表情の認知的研究への示唆を含む。

キーワード：表情、多次元空間フレームワーク、感情、成熟性、童顔

Keywords : Facial expression, Multidimensional space framework, Emotion, Maturity, Babyface

## 1. 背景

日常生活で何気なく行っているメーキャップも、あるいはミラノコレクションに見られるような前衛的なメーキャップも、至近の目的は印象の操作である。そしてそのための手続きは顔の表面をメーキャップ化粧品で着色し、オリジナルの顔の色彩情報を変更することである。よってメーキャップとは、色彩調整による容貌印象操作の技であると要約できる [1]。そこで、どこにどのよう

な色を配置するかということがメーキャップの技術的課題となる。

この課題解決のために筆者ら（第1・第3）が開発したのが図1の顔だちマップである（以下の顔だちマップに関する記述は文献 [2]-[4] に基づく）。顔だちマップは顔の構成要素の形状（目が丸い、唇が薄い等）と、その配置バランス（目が離れている、目と口が近い、顔が長い等）の2次元からなる形態座標で顔を記述・分類する。構

<sup>1)</sup> 東北大学 大学院文学研究科心理学講座、Division of Human Sciences (Psychology), Graduate School of Arts and Letters, Tohoku University

<sup>2)</sup> 東北大学 文学部心理学専修、Faculty of Arts and Letters(Psychology), Tohoku University

<sup>3)</sup> ㈱資生堂 ビューティーソリューション開発センター、Beauty Solution Development Center, SHISEIDO CO., LTD.